

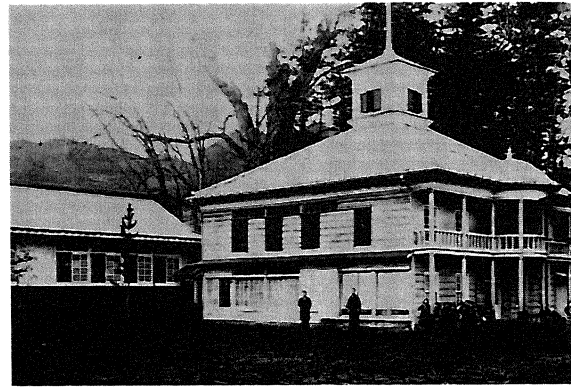
第5節 学校の始まり

西洋造りの 郡内地域では、上野（上野原）学校が明治九年四月に、瑞穂学校が同一〇年に、そして谷村学校
学校建築 が同一二年に、それぞれ塔屋がついたり、バルコニーのある擬洋風の学校が出来ていた。こうし

た学校を作った所は、どこもお役所があり、商店が立ち並ぶ、賑やかな町場であった。谷村の北東一里、桂川左岸の河岸段丘上にある小形山にも、西洋造りの学校が村の人々によって建てられたのである。

明治一七年で、郡内地域の学校建築の形態をみると、和風平屋が二七校、次いで洋風二階建てが五校、和風二階建てが一校、洋風一階建てが一校である。まだ和風平屋の校舎が一般的な時期に、洋風二階建ての学校を作った尾県学校の事例を紹介しよう。

尾県小学校もはじめは民家を借用していたが、やがて塔屋付きのバルコニーのある二階建てのモダンな学校を建てようとした。これは、当時の山梨県令藤村紫朗から発せられた「学校トイエバ必ズ洋風模擬ノ構造ニアラザレバ、其用ヲナサザルコト心得候」という通達に従ったというより、擬洋風で八間四方の上野学校が明治八年に着工し、同九年四月に新築落成式が挙行されたといった刺激の方が大き



尾県学校校舎

かったであろう。

学校の場所としては、明治一〇年六月の史料（『山梨県史』）に「小学校新築の目論見有之、・・・中央便宜の場所」に定めたところとおり、稲村神社の用地で、上地になってきたところである。この用地のうち一反二歩を学校敷地として譲り受けることを内務省に願ひ出て代金一五円余りを大蔵省に納めることで認められている。

学校用地として神社境内の隣を提供してもらっただけではない。建築資材の材木も小形山の共有林である臼木山から伐りだして間に合わせるようになった。後に学校山ともいわれた臼木山での伐採や運搬には村の人々が当たった。「学校人足記」には、明治八年十二月にすでに「先山出る」、「地検出る」、そして「材木出し」などの項目が記されている。学校の基礎工事、大工事のあとの佐官工事の請け負い証文は明治八年一二月の日付なので、翌九年の春には完成していたのだろう。

ただ、尾県学校の竣工までは長い時間が必要だったようである。明治九年九月に稲村神社の祭典に花火を揚げたいという小形山の人々の願ひに、山梨県は「未だ学事隆盛の場合に至らず・・・学校資本に尽力候様」と、さらに尽力を促している。また同九年九月には「未曾有之水災」があつて、「当村尾県学校悉毀壞」してしまった。山梨県に、改めて一〇〇円の拝借金を願ひ出たりして、明治一〇年に入っても学校普請は継続したようである。

谷村学校の分校から独立したのが、明治一〇年五月に晴れて公立小学尾県学校となり、開校式ともなった校舎の新築落成式は、その一年後の一一年五月のことであった。学校建築費用は明治一四年の村長の事務引継書によそ一二〇〇円と記されている。